



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第六十四号（一日発行）
平成七年一月一日

北海の古平風土物語

（三十）

親しい級友・海田綱市君 一
大正十四年・高等科二年担任 千葉信夫先生（九十二歳）

高橋 源 五口

大正十三年の秋ごろ、私の家から近い所（古平町大字浜町、現・栄町）に、大きな牛舎とサイロ、住宅などを建てて、広い牧草地や畑をもつてたくさんの牛を飼い、営業所をここに移したのであった。それ以来、親しい友人（級友）となったのである。

ここには、美国方面から来ていた子どもたちが、いつも入れ替わり立ち替わり八、九人ぐらゐも来ていて、同じ部落の私たちの仲間といっしょに学校へ行っていましたが、その一団はなかなか賑やかであった。

当時、古平町ではただ一軒の牛飼いの屋であったので、牛が珍しくて、ときどき彼の家に遊びに行った。牛舎に入って大きな種牛や、毛色の変わった牛を見たり、子牛をなでてやった

り、変わった形をしているサイロの話の聞いたりした。また、しぼりたての牛乳を貰って飲んだがそのうまかったこと。そして、瓶詰の牛乳を貰って家に帰

大正から昭和初期にかけて

私の見たにしん場風景

4

四、鯨つ

時化の早いこの季節は、鯨の陸揚げを急がなければなりません。時化になると、せつかく獲った鯨を網の口を開いて捨てることもたびたびです。時化を見計らって鯨つぶしが始まりますが、若い衆も家にいる人もものんびりしている暇などはありません。山と積まれた鯨は、まごまごしているの腐りはじめます。

竹内 コト

鯨つぶしというのは、まず笹目（えら）を取ってから鯨の腹を親指で割いて、腹の中の数の子や白子を出すことで、笹目、数の子、白子はそれぞれ別の箱に分けていれます。これは女の仕事で、鯨をつぶす人が二人と、それに男の人が一人ついて一組です。二十一尾づつ縛りますがこれを一連（つら）といつて、

った。

学校の宿題に、地区グループの共同学習や、研究・調査・作業などがあつた時には、同級生であつた加藤健三郎君（現・沼田町在住）も入つて、三人が私の家を集まつてはよく宿題の勉強をしたものである。

時には、学校の勉強が好きであつた長兄の地作に尋ねたりして、お互い励ましあつて勉強をした。彼はなかなか熱心で大人びた一面もあつて、私の家では大変に評判が良かった。（小樽市在住・八十二歳）

謹賀新年



平成七年元旦
古平町史編纂委員会
委員長 越中 庄司
八木 金蔵・辻 光彦
大谷 喜幸・岩崎 勝博
丹後 藤雄
山口 文彦・西館 昌巳
高野 俊和・宮本 正敏
水見 八郎・田岸 倉治
古平町史編纂室長
(総務課長) 工藤 敏尚
村井 芳男

出来高で賃金が払われます。昭和のはじめころ、女の人の賃金（出面賃）は普通三十銭くらいですが、鯨漁の時にはその四、五倍にもなることがあります。しかし鯨つぶしは、地面の上にカバの木の皮かトタン板を敷いて汚水がしみ込まないようにして、ひざの周りをむしろでくるんで汚れないようにしながら、長時間座つたままでの仕事はなかなかつらいものでした。男の人は、鯨を運んできた、縛つたり、それを納屋（丸太を組んで鯨を架ける所）まで運んで行って横木に架けるなど、これも大変な労働です。

「福智院益昌妙純大姉」

即ち私の母の戒名である

つい最近、永六輔『大往生』を流し読みしたが、永六輔の父は浅草の最尊寺の住職で、九十歳で亡くなったが、質素、そして法名も付けないようにと遺言を残した。『十七世釈忠順』という白木の位牌だけが残った。法名または戒名というのは戒めの名前であって、戒めを守って生きていけば本名のままでは

故郷を想

り福井孝平

いと言うのである。けばけばしい名人りの花輪は一つも並ばなかったという。大変おもしろく興味深く読んだ。

さて、母の三十三回忌は三年後になるので、私もあと三年は元気でいたいと思っているが、人の世は明日のことは誰にもわからない。まあ、母の齢まで生きて来たことを感謝している。

母は、今の所で細細と菓子などを商うかたわら和裁を教えていた。狭い部屋にいつも五、六人の娘さんが来ていた。いまでも古平にいて、いいお婆ちゃんに

なっている人たちが、当時の母のこと、私たち兄妹のことを話されると懐かしさでいっぱいになる。鴨居木のわたなべウメちゃん、沢江では田口イクちゃん皆さんきれいな娘盛りだったが子ども心にもこのご二人は特別美人だったと記憶している。イクちゃん姉さんは八幡先生の奥さんで、一番上の姉さんは先生をされていた。役場にお勤めの田口君のおばさんに当たるように、田口君はスキーの指導員として私と縁のあるのも、何か

の巡り合わせかも知れない。田口先生の、紫の袴に眼鏡をかけたあの若々しいところが思い出される。「妹から『せたかむい』を送ってもらっている」とのことで、私の駄文を恥じている。兄の敏雄は三十歳で亡くなったが、「憎まれっ子世にはばかる」で、私はまだこうして健在

である。『せたかむい』をご覧の方からいろいろとお電話やらお便りをいただくことがあります。ありがたいことです。

根雪かと覚悟の雪の降り積る

随想

古平郵便局 木造の旧庁舎のころ

渡辺 ハツエ

十一月二十一日、古平郵便局新庁舎がオープンしました。近代的なすばらしい建物で、町民の一人として、心からお祝いをし喜んでおります。

私はこの夏中、工事の様子をば、今日の日を楽しみにして見守ってきました。工事関係者の皆さんがこの夏の猛暑にもめげず、どうもご苦労さまでした。

いま思い出しますと子どものころ、港町に最初に出来た郵便局の前を通って学校に通っていましたが、浜町から出勤して来た電話交換手さんとよく行き会います。当時の交換手さん方の服装は、たしか濃紺色の袴をはいていたと記憶していますが、学校の先生のようにとても格好がよく、私の憧れでした。

また、戦時中は小包を出すのが規制されていて、一貫目までのものを一人一個、それも一日の数が決められていて、行列をして受け付けてもらったものでした。

昭和十八年五月に主人が軍属

に徴用されて、六か月の任務を終えて十一月に帰ることになりそれで靴とオーバーを送ってほしいとのこと、小包二個にしてそれを郵便局に持って行き、行列をしている人たちに気がねしながら受け付けてもらったことがありました。

その後、昭和三十一年に新しい郵便局が建てられました。当時の思い出としては、年賀はがきを買うのが大変だったことです。早朝から並んで買いましたが、こんな状況が何年も続いたようです。

最近、夜になると子どもや孫たちへの手紙を書いて、それを翌朝になって、郵便局まで自転車でひとつ走り、ポストへ投入して来てはひとり満足しています。

新築の郵便局に、また良い思い出を残したいと思っております。



遙かなる故郷の思い出 4

橋 義 春

二、あわびの話

小学校のころ、夏休みになると海で泳ぐのが何よりの楽しみで、防波堤で泳ぐこともあるが何と言っても丸山の岬だった。海の幸——あわびを、仲間と競い合うように潜って採っては焼いて食べる。今から考えるとなんとぜいたくな？ 遊びだったことか……

岬の手前側から一番岩・二番岩・三番岩と呼ばれている岩場が続いている。一番岩付近はガンゼ(エゾバフンウニ)やノナ(ムラサキウニ)が多かったがなぜかあわびはあまり採れなかった。沖にあるトド岩まで泳いで行くこともあったが、あわびはいなかった。
ガンゼの浜焼きは、ほったたがおちそうな味だった。一番大きいガンゼのとげを石にこすつてつるつるにし、へそを抜き、中身を全部出してからガンゼの身だけをぎっしり詰めこみ、またへそでふたをしてからたき火の中に放りこむ。焼き上がった

ガンゼを割って、アツアツの中身をフウフウしながら食べるがこんなうまいものは、ちよつとやそつとではお目にかかれないうような美味である。
二番岩は、あわびもガンゼもあまりいない所だが、夕日が落ちるころになると、深い所からツブ貝がたくさん浅瀬に集まっ

て来るので、そこをねらって採る。一時間もすると竹の手かごに半分ほど採れた。家に帰って帰ってすぐに祖母にゆでてもうが、ゆであがったツブを、くぎを使って中身を抜き出して食べる。古平のツブ貝の味は美味の一語に尽きる。本州の伊豆半島の海岸でも同じようなツブ貝が採れ、食べてみたが味は全く問題にならないくらいまずかった。
三番岩は、ガンゼ・ノナ・ヒル貝などが採れるが、なんといつてもここはあわびの宝庫であ

[明治38年]

代々の古平橋渡り初め

[昭和33年]

浜町と沢江町を隔てている古平川に、初めて橋が架けられたのは明治二十八年で、人がよく通れる程度の仮橋であったが、これが「古平橋」の初代である。当時は、渡し守がいて、竹浪定市がやっていた。

明治三十七年六月に洪水で橋が流されたが、すぐ工事にかかり、翌三十八年一月完成した。この二代目古平橋の渡り初めをしたのが田附さん一家で、

勘右衛門一ギン・源吉一シナ・太吉一ツナの三夫婦であった。この橋も、大正の末に洪水で一部が壊れ、後で修理をした所と段がついてしまった。

その後橋も老朽化し、それまでの橋では自動車の通行もできなかったことから、昭和六年にポニートラス式つり橋(材料を組み合わせた構造)に架け替えられ、十月二十八日の渡橋式には再び田附さんと堀さん一家の

る。この場所は禁漁区になっていて、あわびの繁殖に最も適している場所だといわれている。だから年間を通して、磯まわりの舟もヤスを入れてはならない規則になっている。いわばここは、あわびにとつての「聖域」であった。この聖域であわびを採ろうという悪童連がいた。

二組の夫婦三代が、三代目古平橋の渡り初めをした。

◆田附家 源吉一シナ・太吉一ツナ・源蔵一チャウ

◆堀家 樫蔵一ノヨ・玉吉一トリ・熊三郎一リツ

「初雪、昨夜から雪が降り続き近くの山、屋根が真っ白になった。古平橋渡橋式、午後一時より田附、丸山町堀、三夫婦が渡る。古平には過ぎた立派な橋だ夜になつても雪が降る。」

(高野名幸作：日記より)
やがて昭和三十三年十月、積丹国道の開通により近代的な四代目の古平橋がお目見えした。

◆桐沢家 定吉一ヒデ

◆秀治一薫 健一優子

◆木村家 喜藤一さくら

藤吉一とわ・豊吉一京子の二組・三代の夫婦であった。

―庶民にとつては高根の花― 初めて聴くラジオに大歓声

本間 銀朔

昭和三十二年発行の古平町勢要覧によると、千七百三十世帯人口一万百三人、電話台数二百五十八台、ラジオ千七十台とあります。

現在は、千八百十八世帯、人口四千九百六十一人（平成六年九月住民基本台帳）、電話台数千九百三十七台（電話番号簿）となっていて、三十七年前と比べると電話台数は約七・五倍にも増え、時代の移り変りの甚だしいのに驚いています。ラジオについては、世帯数の数倍？あるものと思われます。

今はテレビの世の中ですが、昔、古平でラジオ放送を初めて聴いた時のことを、記憶をたどって書いてみることにします。私が小学校六年生であった昭和三年、北海道でもラジオ放送が始まると、入舟町の①山口金治さん宅ではラジオを取り付けました。大勢の人がそれを聴きに集まり、私もその時、はじめてラジオというものを聴きました。

た。

山口さん宅は、道路沿いに海に面して、間口は二十米以上もある立派な二階建ての住宅で、裏には大きな石蔵があり、練定置漁場を持っていて金満家といわれていました。

家の両側に、二階の屋根よりも高い木の棒を立て、それに針

柳

柳で見える世相

△評▽北海タイムス柳壇選者 齊藤 大雄

大國の経済作る蜂と蟻

△評▽ 経済大國ニツポン、いつの間にかそう呼ばれるようになった。だれも庶民が血と汗を流して働いているとは言わなかつた。

人間の匂いのしない町がある
△評▽ 武器を売る店、麻薬を売る店、青い血になるまで売る店が大都会にはある。そこには吸血鬼だけが生き残っていた。

金を張っていたので、学校の帰りにはわざわざ遠回りして、何をやるのか見ていたものでした。それがアンテナというものだと後で知りました。

そのうちラジオというものを取り付けて、近所の人たちにも聴かせてくれるとの話でした。

ラジオとはどんなものか、見たことも聞いたこともないので子ども心にも聴くたく、なお見たいと思いました。

やがて放送が始まるということで、夕方、家の人に連れられて山口さん宅に出かけましたが、

北 政 道

永遠のテーマ平和に苦悩する

△評▽ 平和とは、戦争をしないこと。人間同士がいがみあわないことを知っていながら、人間の欲望が人間の平和を乱している。

がむしゃらに働いて貧乏の中
△評▽ 誰のことを言っているのだろう。お爺ちゃんのことかな、お婆ちゃんのことかな。いや、これからの僕のことだよ。

家の前は人でいっぱいでした。座敷には有志のかたがた、私たちは玄関に入った土間で聴きました。座敷の一段と高くなつた所に、鶴の首に大きいラッパが付いたものがあって、その下に四角い箱に入った機械が置いてありました。

そのうちに何か人の話し声が聞こえてきて、いよいよ放送が始まったようです。私には何が何だか分かりませんでした。が、まわりの人からは大きな歓声と拍手がわき上がりました。

この時、古平町でラジオからの第一声を聴いたわけです。中に入れなかつた人も順番で聴きました。しばらくは町中、ラジオの話題で持ち切りでした。

当時は、受信機と設備費などで相当な金額だったようで、一般家庭にまで普及したのはずつと後のことでした。

山口さんでは、札幌放送局が開局（昭和三年六月）したのと同時にラジオを取りつけた、という最近知りました。

※当時のラジオの値段はおよそ二十五円、白米一俵（六十キロ）が十円で買える時代でしたから、庶民にはちよつと手のない高価なものでした。